



京大広報

No. 629

2007.12



ジェーン・グドール博士（左）に名誉博士の称号を贈呈
—関連記事 本文2506ページ—

目次

京都大学における環境安全衛生 大寫幸一郎……2504	宇治キャンパス公開2007を開催……2510 「平成19年度第1回事務改善G P」表彰式を開催 ……2511
〈大学の動き〉 「船井哲良記念講堂・船井交流センター」 竣工記念式典を挙……2506 ジェーン・グドール博士に名誉博士の称号を贈呈 ……2506	「アトムサイエンスフェア2007」を開催……2512 国際交流会館おうばく分館で消防訓練と交通安全 講話を実施……2512 ジェーン・グドール講演会を開催……2513
〈寸言〉 大学と人生 木下博夫……2507	〈訃報〉……2513
〈随想〉 入試雑感 名誉教授 天野正輝……2508	〈日誌〉……2515
〈洛書〉 育てること,教えること,学ぶこと 西川元也……2509	〈お知らせ〉 再生医科学研究所平成19年度学術講演会……2515 第11回リカレント教育講座『「心の教育」を考える —発達障害と家族への支援—」……2516
〈話題〉 平成19年度京都大学森林科学公開講座「森を食べる —森と木と健康—」を開催……2510	〈隔地施設紹介〉 フィールド科学教育研究センター和歌山研究林 ……2517

京都大学広報センター

<http://www.kyoto-u.ac.jp/>

隔地施設 紹介



フィールド科学教育研究センター 和歌山研究林 (<http://fserc.kais.kyoto-u.ac.jp/waka>)

フィールド科学教育研究センター 森林ステーション 和歌山研究林は、和歌山県の北東部、「紀伊山地の霊場と参詣道」として世界文化遺産に登録された高野山の南西、和歌山県出身の作家、有吉佐和子の小説にも描かれた有田川の支流である湯川川の最上流部に位置します。



和歌山研究林全景

その歴史は、大正15(1926)年1月に、和歌山県有田郡八幡村の海瀬定一氏所有の山林564.5haに、99年の地上権が設定されたことに始まります。その後、事務用地0.15haの購入、隣接地289.5haの地上権が追加設定され、現在の面積は842haとなっています。

研究林内の標高差は約800mで、極めて急峻な地形となっており、断崖・崩壊地が多く、沢筋には滝が見られます。特に「下り滝」は落差が約50mあり、広葉樹に囲まれたその美しい景観を見ようと、1年を通じて多くの人々が訪れます。

しかしながら、研究林を取り巻く交通事情は非常に厳しく、京都から研究林を訪れるには、公共交通機関を利用する場合、京都駅からJRで最寄りの紀勢本線藤並駅まで約2時間、そこから有田鉄道バスで清水営業所まで約1時間半、さらにタクシーに乗り換え約30分、合計4時間を要します。また、自動車を利用する場合は、名神・近畿・阪和・海南湯浅の各有料道路を通行して、約200km、3時間半の道のりであり、その上、事務所の直前約4kmは未舗装の林道を走行しなければならず、研究林へお越し頂くにはそれなりの覚悟が必要です。

更に、研究林には宿泊施設がないため、調査・研究などで長期滞在する場合は、事務所から約16km離れた旧清水町内の民間宿泊施設を利用しなければなりません。

研究林全域が水源涵養保安林・鳥獣保護区に、一部が高野龍神国定公園に指定されています。林内にはカモシカ、ニホンジカ、イノシシ、ノウサギ、タヌキ、テンなどが生息しています。カモシカ、ニホンジカ、ノウサギは幼齢造林木の枝葉の摂食、幹の切断、樹皮の剥離などの被害を起こしており、紀伊半島では数少なくなったツキノワグマも、数年に一度その痕跡が見られます。

本研究林の年平均気温は12.3℃、年降水量は2,647mmで積雪は少なく、森林植生は暖温带林上部から冷温带林下部の間に相当し、標高700m付近までは暖温带林の構成種である常緑広葉樹のアカガシ、ウラジロガシ、ソヨゴなどが優占する植生であり、その上部で本研究林の面積の大半を占める標高約700~1,000mの部分は中間温带林にあたり、常緑針葉樹であるモミとツガが優占していますが、その中に落葉広葉樹(ヒメシャラ、シデ類)や常緑広葉樹が部分的に生育しています。

さらに標高約1,000m以上の稜線に近い標高域は、冷温带林の代表種であるブナをはじめとする、ミズナラ、ミズメ、カエデ類といった落葉広葉樹から構成される植生となっています。

このように標高の違いに応じて多様な林相がみられることを利用し、尾根を歩いて下りながら、ブナ林、モミ・ツガ林と続く森林の垂直分布や、倒木などによる天然更新の様子、天然生林とスギ・ヒノキの人工林との違いを体験する森林見学のモデルコースを設定し、見学者に紹介されています。

研究林設置以前にはマッチの軸や板材などの生産を目的として針葉樹、広葉樹ともに盛んに伐り出されていたらしく、昭和3年の演習林概要によると針葉樹、広葉樹ともに直径10cm程度のものが大半で、設置当時の林相はかなり貧弱であったと思われます。

その後、スギ、ヒノキの人工造林が積極的に進められた結果、現在では人工林率が50%を超えて、フィール



和歌山研究林の位置



ド科学教育研究センターの研究林では人工林率が最も高く、こうしたことから、人工林の育成・施業に関する教育・研究が盛んに行われています。

職員構成

教員 2 人、技術職員 6 人、
技能補佐員 1 人



ウッズサイエンスの様子

林業のさかんな紀伊半島にあって、地上権設定当初から手を加えずに維持

されてきた八幡谷学術参考林は、和歌山県内でも貴重な天然生モミ・ツガ林として、古くからその生産力・動態・土壌動物相・昆虫相などの研究が数多くなされており、現在も、フィールド科学教育研究センターによるプロジェクト研究の対象地として、森林の動態と多様性維持機構の解明、森林生物種の生活史と相互作用の解明、森林生態系の物質循環からみた環境保全機能の解明などを目指して、調査・研究が行われています。

和歌山研究林では、地域開放特別事業として、さまざまな事業を行っています。和歌山県立有田中央高等学校清水分校と共催し、1年生を対象とした「SHIMIZU タイム」(総合的な学習)では研究林に存在する多様な森林について学習しています。また、2002年度より3年生を対象に、林業に関する科目「ウッズサイエンス」を開講しています。「ウッズサイエンス」では研究林内で週1回2時間の授業を行い、地域の主要な産業である林業について学習し、森林内での実習を通して自然の素晴らしさに触れ、「緑を守ることの大切さ」を身につけ、また、身の周りの自然環境について自ら考えまとめる力の習得を目指しています。授業の主な内容は、「森の仕組みと働き」、「木材利用の現状と日本林業」などの講義と、コンパスを使った測量、樹木識別、チェーンソーなどの林業機械を使った間伐作業などの実習です。



森林体験学習

有田川町立八幡小学校とは、森林体験学習を実施しており、2007年度は小学5年生24名を対象に、春は植樹体験、秋は間伐体験を行いました。



和歌山研究林に建つ j.Pod

昨年は、有田川町教育委員会との共催で小中学生を対象とした山観察会を開催し、有田川河口近くの有田市立田鶴小学校の生徒たちは、身近な川がどこからどの様に流れてくるのかを、自分たちの目で直接見て体験する学習などを行いました。

2005年春には、京都大学と企業の共同開発による「森林資源の循環的有効利用」を目的とした新しい木造建築システム(j.Pod)による教育研究棟が完成し、学生実習や地域開放事業の講義室として、また、採取してきた渓流水や土壌などを分析する実験室として利用しています。

和歌山研究林の間伐材を利用した j.Pod は、京都大学の北部構内と本部構内にも各1棟が建てられています。2006年8月に本部構内に完成した j.Pod は、国際交流セミナーハウスとして海外からの学生に活用されています。今後も和歌山研究林の間伐材を用いた j.Pod の建築が予定されており、間伐材を大量に有効利用するモデルとして、これまで放置され続けてきた日本の人工林を生産性の高い森林へ変え、低迷する林業を活性化させることが期待されています。

〒643-0551

和歌山県有田郡有田川町上湯川76

電話：0737(25)1183

FAX：0737(25)0172

E-mail：waka@kais.kyoto-u.ac.jp

http://fserc.kais.kyoto-u.ac.jp/waka

アクセス

- ・京都駅からJR紀勢本線藤並駅下車、有田鉄道バスで清水営業所下車後タクシーを利用、合計約4時間。
- ・名神・近畿・阪和・海南湯浅の各有料道路を通行して、約200km、3時間半。